

われていくことを期待したい。

iGrid2000に関する詳しい情報は、下記のホームページで得ることができる。

<http://www.isoc.org/inet2000/igrid.shtml>

<http://www.startap.net/igrid2000/>



CAVE を用いたデモンストレーションの様子

## ◆ SIGGRAPH2000 報告

長谷川晶一

東京工業大学

(Newsletter Vol. 5, No.8 より転載)

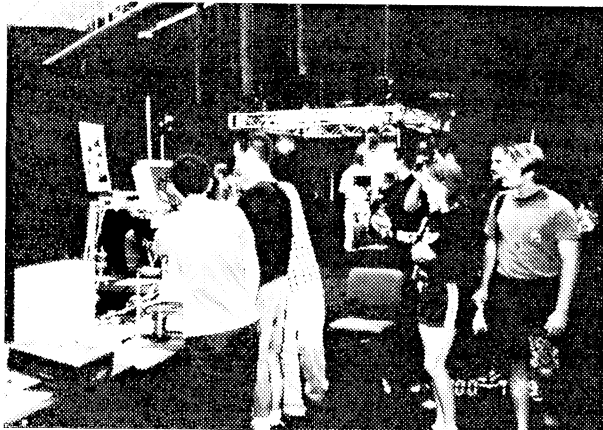
今年も ACM Computer Graphics の年次大会 SIGGRAPH が行われた。今年はいリジアナ州ニューオリンズにて、例年より少し早い7月23日から28日までの会期で行われた。この期間に、コース (Courses)、口頭発表 (Papers, Panels, Sketches & Applications)、技術系のデモ展示 (Emerging Technologies)、芸術作品の展示 (Art Gallery)、Computer Graphics Animation の上映 (Electronic Theater, Animation Theaters)、企業の展示 (Exhibition)、その他の Special Session などが行われた。筆者は Emerging Technologies に出展していた。

### Emerging Technologies

技術系展示は名称が毎年変わるが、今年も Emerging Technologies の名で行われた。毎年日本からの出展が多い技術系展示だが、今回は ATR が5件出展していたこともあり、26件中11件が日本からの出展だった。メガネなしステレオ視ディスプレイが4種あったことが印象に残っている。また画像処理が気軽に使える技術になったことを実感させられた。Mixed Reality 技術を用いた展示、実世界指向インタフェイスが増えてきたことも印象に残った。

### Art Gallery

今年も E-Tech の隣で行われていた。大学の作品など技術的なサポートを活用したものもあったが、個人での出展も多かった。



展示終了後の Emerging Technologies 会場の様子。展示が終わり、まわりが明るくなっても見学者が絶えない。

### Session

例年にも増して広いホールで、さまざまなセッションが行われた。筆者は、Animation、Light Fields、Interactive Techniques を聞いたが、従来提案された手法が十分に実装、検討されることで各手法の可能性と限界が見えてきたように思えた。

### Exhibition

毎度おなじみのモーションキャプチャーが一堂に会していたこと、Sensible が PHANTOM のハイエンド版をまったく展示せず FreeForm 一本に絞った展示をしていたこと、nVIDIA が会場だけでなくニューオリンズの町じゅうに広告を出していたことなどが印象に残った。

### ニューオリンズについて

観光地であり、ケイジャンとクレオール伝統料理があり食べ物に困らない町だった。繁華街の中心は、毎晩3時ごろまでにぎわっていたようだ。蒸し暑い町だが東京ほどではなかった。

## ◆ ISAR2000 参加報告

加藤博一

広島市立大学

(Newsletter Vol. 5, No. 10 より転載)

98、99年と workshop として開催されたこの会議も参加

者の増加に伴い、symposiumに格上げされ、IWAR99からISAR2000と名称も変わり、初めてヨーロッパで開催された。それでもなお（ヨーロッパ開催の影響もあってか）参加者は100名強という小さな会議で、ミュンヘン工科大学内の1室を借り、2日間の日程で行われた。日本からの参加者は15名程度だったと思われる。

会議では、3件の招待講演、16件の論文発表、7件のポスター発表、数件のデモンストレーションがあった。招待講演では、MR研の田村秀行氏がMR研での最新研究成果とその他日本国内のMixedReality関連研究を多くのビデオを活用し紹介した。多くの最新技術のトピックを含んでいたために、詳細な質問も多くあり、非常に好評だった。

論文発表は、

- 1) Information Presentation, Large Environment
- 2) Application, Head-mounted Displays
- 3) Vision-Based Methods
- 4) Non-Optical Calibration and Tracking

からなり、それぞれ質の高い発表を含んでいた。これまでは、Trackingの話題が大半を占めていたが、今回はそれに加えて、ARとは兄弟のような関係にあるWearableSystemへの実装に関する話題やHuman Computer Interactionへの応用などアプリケーション指向の発表が増えてきたと思う。興味深かったのは、現在ARに適したHMDの製造

から多くのメーカーが撤退し、多くの研究者が高性能なHMDの入手に悩んでいる中、日本から2件のHMDの研究発表があったことだった。MR研高木氏からはステレオカメラ内蔵視差無しビデオシースルー型HMDの発表、通総研清川氏からは相互隠蔽可能な光学シースルーHMDの発表があり、多くの参加者の関心を集めた。トラッキング手法に関しても年々と難しい問題を扱うようになり、OxfordのGillesSimon氏のマーカー無しトラッキング手法の発表が興味深かった。

ポスターとデモは1日目の午後に行われ、私自信がデモ発表をしていたために他のポスター・デモを見ることは出来なかった。ARの分野の研究はリアルタイムに動いてこそ意味があるものが多いため、デモは非常に効果的であるという思いで日本から重い機材を持参しデモを行った。概して外国人は「評価する」ことと「楽しむ」ことを分けて考えるようで、私のデモに対しては大いに楽しんでいた。

来年のISAR2001は、ニューヨークで行われることが決まった。来年の会議に関する詳細は公表されていないが、これに関する情報またその他のAugmented Reality研究に関する話題は、

<http://www.Augmented-Reality.org/>

というウェブサイトを時々チェックすれば得られるであろう。